

氣丈なること也と挨拶して、明ばん來られよとかへしやりしとぞ、あくるばんもゆきしに、前夜の如く壹人居と、此度は蛇のせめ也、大小の蛇いくらともなくはひ出て、袖に入、ゑりにまとひ、わるくさきことたへがたがりしを、是もにせ物とおもふ計にこらへとほして有しとぞ、いざ明晩をだに過しなば傳受をえんと心悅て、よくばん行しに、壹人有て待共く、何も出こずや、たいくつにおもふをりしもこはいかに、はやく別し實母の末期に著たりし衣類のま、眼引つけ、小ばなおち、口びるかわきち、み齒出て、よはりはてたる顔色やうぼう、髪のみだれそ、けたるまで、落命の時分身にしみて、いまもわすれがたきに、少しもたがはぬさまして、ふはく、とあゆみ出た、むかひて座したるは、鼠蛇に百倍して、心中のうれひ悲しみたとへがたく、すでに詞をかけんとするてい、身にしみく、と心わるくこらへかねて、眞平御免被下べしと聲を上しかば、母とみえしは和尚にて、笑座して有しとぞ、正左衛門めいばくなさに、夫より後二度ゆかざりしとぞ、

狐符

〔和漢三才圖會三十八〕狐〇中

狐有花山家能勢家之二派、相傳云、往昔有狐狩、老狐將捕、急逃隱花山殿乘輿中、乞赦遂得免矣、能勢何某亦雖時異而助死之趣相同、共狐誓曰、至子孫永宜謝厚恩也、自此子今有狐魅人、則以二家之符置閨傍、乃魅去平愈、其固約人亦可愧也、

以狐爲神體

〔續古事談二〕古臣へ野干ヲ神ノ體トナシタル社ノホトリニテ、キツ子ヲ射タルモノアリケリ、コ

ノモノトガアリナシノ事、陣ノ定ニ及テ、諸卿サマノニ申ケル中ニ、帥大納言經信卿申テ云ク、白龍之魚勢懸、預諸之密網ト計リウチ云テキラレタリケリ、イミジキ神ナリトテモ、キツ子ノスガタニテハシリ出タラムヲ射タラムハ、ナニノトガ、アラムト云心ナリ、此事ハ龍ノ魚ノスガタニナリテ、浪ニタハフレテウカビイデタリケルホドニ、預諸ト云モノ、アミヲヒキケルニカ